広報はいづか 108 号（平成 26 年５月）

アケビ

アケビの花が咲きました。同じふさの中に、大きめの雌花と小さめの雄花がぶら下がります。毎年楽しみにして、そのユニークな姿を探します。

さて、アケビ名を聞いて思い浮かぶのは、ぱっくり割れた実と、種子を包むゼリー状の果肉でしょう。郷愁を誘われるかたも多いのではないでしょうか。ただし、私自身は、アケビの実がなっているところを見たことがありません。アケビの蔓なら、身のまわりに掃いて捨てるほどあり、ほぼ毎日目にしているのに、です。以前から不思議に思っていたので、これを機会に専門書などで調べてみました。

アケビは自家不和合性のため、結実には他家受粉が必要ということです。こういう性質は、種子植物の中では、ごくありふれたことです。果樹園では、しばしば複数品種が植えられますが、それもこの自家不和合性のため。果樹の苗は接ぎ木や挿し木でつくられることがほとんどなので、品種が同じなら別の株でも遺伝子は同じことが多く、隣同士で他家受粉をさせても実質的には自家受粉と同じことになってしまうからです。

ここまで考えて、はたと思い当りました。自生のアケビは人が挿し木でふやしたわけではないけれど、自力で挿し木と同じふえ方をしてきたのではないか。地面をはっている蔓を見ると、節ごとに根を出しています。蔓が切れても、この新たな根を拠点にして成長することができます。近所同士でたくさんはえているアケビの蔓は、大部分が一卵性の兄弟なのかもしれません。